

松下幸之助に学ぶ!!

『繁栄への道』

第一回

文・全国PHP友の会

会友 梶浦 洋一

(徳島PHP友の会顧問)
(H/PHPA G &
『葉根譚の会』世話人)

今年の通常国会は『伊勢志摩サミット』や『政治資金問題』を抱えているとはいえず、経済・外交の課題が山積している割には議論が深まらず、多くの法案の処理は先

送りされて成果の乏しい国会となった。

私たちは国民の気持ちとしては、オバマ米国大統領の『広島原爆資料館訪問』が【核廃絶への動き】につなが

る道になつてもらいたい思いである。

『熊本地震』は、すでの1500回を超えた余震があり、『中越地震』を上回る4兆円超(試算)といわれている被害を惹起している。

そのようななかで、これから7月10日の参院選挙に突入していく。

景気の低迷は続き、日銀の『ゼロ金利』政策もさしたる成果をあげないまま、アベノミクスの新3本の矢の【的】がクローズアップされている。

*** 成長戦略!**

①強い経済【目標】

GDP 600兆円

②子育て支援【目標】

希望出生率1.8

③安心社会保障【目標】
介護離職ゼロ

* 1億総活躍プラン!
さて、本題に戻ろう。

快適感情について

先月号は青木アチーブメント(株)社長と佐藤(株)PHP研究所専務とのやり取りは、『幸之助の幸福感』Ⅱ【幸福の三要件】で終わっていた。

■【快適感情】のなかで生きていることが幸せである

青木社長は、「ご自身の考えを示された。」

「私が考える幸せは『快適感情』のなかで生きている状態です。自分の周りの人も『快適感情』のなかで生きていくのが幸福だと思うのです。」

物事には事実と解釈がある。同じ出来事を見ても、プラスに解釈する人とマイナスに解釈する人がいます。つまり事実一つでも、解釈は無数にある。私は肯定的に解釈できる心の状態にある人が幸せだと思います。

いつも不平不満を持っていたり、誰かのせいにするのは不幸な状態です。何が起き

ても「これは天が自分を鍛えてくださっている」と解釈できる、もつというところ、自分で自分はどうすればもつとよくなれるだろう」と考える心のあり方にもつていける人、そんなふうに自分の心の状態をコントロールできる人が幸福だと思います。これは能力開発的には『よい充実行動の状態』といえます。

バイブルには「自分を低くする者は高くされ、高くする者は低くされる」という言葉があります。だから「こんなに豊かだ」とか、「こんなにお金がいっぱいある」というようなことを自慢すれば祝福が小さくなってしまう。むしろ見えないところで自分が役に立つ、たとえば困っている人の力になったり、サポートできる状態をめざすのが幸せになる道です。

リアルな生活のなかでしたら、家族の笑顔、社員の笑顔、お客さまの笑顔を見るときがいちばん幸せを感じますね。そう考えると、幸せは人との関係を見無視して成り立つものではありません。



おつしやるように、自分だけが幸せだと思つていても、独りよがりの幸せだったら、本当には幸せではないと私は考えます」。

佐藤専務は、応じた。

「幸せは自分で気づくものなのかもしれませんね。幸之助は自分がまだ電灯会社で配線工をしていたころ、『天国』を発見したといつています。それはある夏の暑い日のこと、幸之助は古いお寺の天井裏に上がつて配線工をしていました。屋根は灼熱の太陽に照らされ、天井裏は想像を絶する暑さでした。そのうえ、屋根裏には何百年分ものほこりがたまり、呼吸もまともにできないほど劣悪な環境でした。

そのなかで幸之助は汗みどろになつて工事を行い、ようやく仕事を終えました。そして外に出たとたん、別天地のように涼しく、きれいな空気に感動を覚えるのです。それはまるで地獄から天国に上がってきたような気分だったとふり返っています。

天井裏からただ外に出て

きただけ。それなのに、こんなに幸せを感じられるという経験から、幸之助は幸せは気づかないところにあるのだということ、また苦しいことがあつてもそれをやり遂げたときは、なにに代えがたい喜びがあることを知るのです」。

■天分を見つけないといふ思いをもち、可能性を限定しない

青木社長

「夢中で仕事に没頭すれば、苦しさをおぼえることができ、またやり遂げた喜びも感じられるといふことですね。ところで、その仕事において、人はどのようにして自分の天分を見つければいいのでしょうか」

佐藤専務

「そこが難しいところです。自分にはこの仕事は向いていないと思つても、あとになつてこれが天分だったとわかることもあります。でも幸之助はどんな人間にも天分は必ずある、といつています。それを見つめるためには、まず何よりも、『何とかして天分を

見いだしたい』と、強く求めることが大切だといふんですね。

まず求める。そうすれば、いろいろな出来事や事象に遭遇したときに、ピンと来る場合があります。求めていなければ、そもそも気づきません。

それから幸之助によると、周りの人に尋ねてみることも大切です。案外、他人といふのは自分よりもちゃんと見てくれていて、『あなたはこういう人で、こういう性格だから、こういうものに向いているんじゃないか』と指摘してくれたりするものです。自分の天分や持ち味を、自分の勝手な思い込みだけで判断していることもありま

すからね。

ですから、どうやって自分の天分を見いだすのかという答えとしては、上司や会社からいろいろな仕事をふられたり、異動させられても、それを新しい能力が開発されるチャンスととらえる。自分ではこれしかできないというのではなく、けっこう幅があ

ると考えたほうが天分は見つけやすいと思います」。

■六〇パーセントの可能性があれば、その人間にやらせてみる

青木社長

「幸之助さんご自身社員は天分をどのように見いだしていたのでしょうか」

佐藤専務

「やはりその人がやりたいたいことをやらせるのがいちばんだと思います。

とはいえ、ではその人がやりたいことをやらせて全部うまくいくかというと必ずしもそうではありません。本人が勘違いしている場合もありますから、そこは修正してあげないといけない。

ただ、本當に向いているかどうかはやらせてみないとわからないことが多いものです。幸之助は社員に仕事を任せるとき、六〇パーセントの可能性があればやらせていたということです。八〇パーセントや九〇パーセントを求めると、その基準に

達する人はなかなかいません。かといつて半々とリスクが大きすぎる。でも六〇パーセントぐらいなら、失敗する場合もあります。だいたいみんなそれ以上の働きをしてくれたというようなことをいっています」。

青木社長

「中尾哲一郎さん（*松下電器の元副社長。幸之助の右腕として松下電器の技術を支えた）の天分を引き出したのも、幸之助さんの力ですね」

佐藤専務

「中尾さんはプラグやソケット、ランプから出発した松下電器がアイロンを開発して、大きく飛躍するきっかけをつくった人です。もともと関東の人でしたが、関東大震災で焼けだされ、大阪に流れてきて、松下電器の下請けだった檜山工場というところで働いていた職人です。」

このエピソードなどについては中尾専務時代に筆者は仕えていたので来月解説したい。

（つづく）